

会話の開始に先立つ他者の注意の引き出し

——地域の書道サークルにおける相互行為を事例として——

○東京大学大学院 坂井愛理
国立国会図書館 亀澤明彦
東京大学大学院 中山莉子
東京大学大学院 金志勲
東京大学大学院 秋月優里
東京大学大学院 楊映雪
東京大学先端科学技術研究センター 荻野亮吾
東京大学高齢社会総合研究機構 後藤純

1. 目的

本報告の目的は、地域の書道サークルにおいて、共に学ぶ者に話しかけることがどのように行われているのかを考察することにある。習字は個人作業であるから、書道サークルが制度的に設定する内容のなかには、他者と会話することは含まれていない。また相互行為上も、習字に集中しているとき、わたしたちは他者との会話を行う用意がない。いわば書道サークルは焦点の定まらない相互作用（Goffman 1963 = 1980）として組織されており、他者との会話が行われるためには、状況を、焦点の定まった相互作用として組織し直すことが必要となる。ではこのとき、書道サークルの参加者たちはどのように他者との対面的かかわりを形作っているのだろうか。

先行研究では、対面相互行為の開始に先立って、物理的に共在する者を相互行為の共参加者として組織するための予備的な局面があることが指摘されている（Mondada 2009）。この局面に、参加者は、互いの注意の焦点を定め、共通の相互行為空間を確立する。本報告では、書道サークルにおける予備的な局面がどこにあり、その局面がどのように利用されて、参加者間の共同注意が確立されているのかを考察する。

2. 方法

対象とするのは、千葉県T団地における書道サークルのやりとりである。参加者たちが3つのテーブルに輪になって座っているところに、いろは順の字の並びが書かれたお手本が配られている。参加者は、いつ、どこからでも書き始めて良く、到達目標も定められていない。約20人の参加者に対して講師は1人であり、わからないことがあったとき、参加者は周りに尋ねながら習字を進めている。このサークルに対して、2018年9月と2019年3月にビデオ撮影を行なった。1回の撮影時間は約2時間半であり、撮影への協力者はそれぞれ11名と13名であった。撮影したデータは、会話分析（Schegloff 2007）の方法を用いて分析を行なった。分析では、周囲の参加者に対して質問がなされている事例に注目し、習字サークルの参加者が他者に話しかける方法を考察した。

3. 結果

収集されたデータにおいて、話しかける相手が書を書き終えてから次の半紙に書を書き始めるまでの局面にあることが、話しかけることが可能な機会として利用されていた。たとえば、話しかける前にこの局面にある参加者を探したり、この局面が終了する直前に話しかける方法が見られた。話しかける相手がこの局面にあるとき、参加者は、発話や身振りを使い、相手が自分に注意を向けることが可能な環境を形づくってから、他者に質問を行っていた。たとえばある事例において、参加者はまず相手のお手本を覗き込むことによって、相手との相互行為に関心があることを明示的に示していた。またほかの事例において、参加者はいろは順の字の並びを声に出して自問することで、課題についてトラブルを抱えていることを周囲に向かって示していた。

4. 結論

習字は決まった手順に従って進められるため、個人作業がめいめいのペースで行われていたとしても、他者に話しかけることが可能なタイミングが公的に用意されている。この局面は、他者との共同注意を確立するための準備や調整を行う際に、参加者が利用可能な機会である。